

2月1日 年間第4主日

エシ 1:4-5, 17-19 | コリ 12:31~13:13 ルカ 4:21~30

1. ルカ

v.21 「そこでイエスは、“この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した”と話し始められた。」

今朝の福音書の朗読配分が v.21 から始まっていることに注目しましょう。マルコおよびマタイ福音書と同じ伝承を用いながら、そこには著者ルカによる独自の解釈を示す物語りの拡張が行われているからです。教会で会衆に向かって聖書が朗読されるとき、そこで語られている神の救済史が確かに実現して行くという実感を、ルカはここで述べようとしていました。福音は終末の裁きと神の国の完成に至る救いの御業であって、信じる者たちの中に現に働いている(1テサ 2:13)神の力(ロマ 1:16)だからです。

v.22 「皆はイエスをほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚いて……」

ナザレの村の人々が驚いたのは、イエスの説教がたいへん“ありがたい良いお話”に聞こえたからでありました。しかし、彼らは神の救済史の告知としての“神のことは”を聞き取る信仰に欠けていました。

初代教会から現代の教会に至るまで、人々が悔い改めなければならない罪は、神のことはよりも耳触りの良い人間のことはの方に誘われるということです。信仰の有無に関わらず、“ありがたい良いお話”は人の心を潤します。しかし神の救済史の告知としての“キリストの福音”、“神の国の福音”は、信仰によらなければ聞き取ることが出来ないからです。

ユダヤ人たちが皆憤慨して、遂にイエスを十字架につけるに至ったその罪を、この物語りを聞くすべての会衆が自分たち自身の罪として気づき、悔い改めて、“神の秘められた計画”(1コリ 2:1)としての福音を聞き取るようになることを、著者ルカは期待したのです。

使徒パウロも言っています。

「わたしの言葉もわたしの宣教も、知恵にあふれた言葉によらず、“霊”と力の証明によるものでした。それは、あなたがたが人の知恵によってではなく、神の力によって信じるようになるためでした。」(1コリ 2:4-5)

2. エシ

預言者とは、神から言葉(メッセージ)を預かった人のことでもあります。

預言者エシミヤの場合と同じく、教会はキリストの福音を宣教すべく預けられています。使徒継承とは、この福音宣教の委託の継承に他なりません。教会の宣教の中身は使徒たちから伝えられたキリストの福音でなければならず、時代が変わったからと言って、新しく創作された“擬似福音”、“ありがたい良いお話”であってはならないのです。

神は聖伝と聖書によって、これを代々の教会に継承させてくださっています。あらゆる時代の波風を乗り越えて、「神の言葉は生きており、力を発揮し」(ヘブ 4:12)、これを聞くキリスト者に「霊の乳」(1ペト 2:2)を与えます。

3. 1 コリ

神の国を受け継ぐキリストの体としての教会について述べた後、使徒パウロはコリントの教会の人々に、賜物としての愛を祈り求めなさいと勧めました。

愛という用語は私たちにとって耳あたりの良い言葉なので、使徒パウロの本来の意図とは関係なく、しばしば聖書における前後関係からも切り離されて、それだけで一人歩きして使われています。このテキストも“愛の賛歌”などと呼ばれて、神のことばとは全く無関係に“美しい言葉”として、人々に知られるようになりました。

使徒パウロがここで言っているのは、キリストの体である教会を造り上げて行く愛のことです。ヨハネ福音書が「互いに愛し合いなさい」と言うとき、それは共にミサをささげる共同体としての教会の一致と団結のことを指しているのと同じです。

ですからそれは、洗礼によって私たちをキリストの体とならせてくださった十字架の福音への愛であり、神の国の希望と固く結びついています。

そしてこの愛は、霊的な賜物としての愛であって、信じる人々に上から与えられるものなのです。「愛は決して滅びない」(v.8)のは、それがキリストの愛に起源しているからです。

「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。」(1ヨハ 4:10-11)

私たちは“ありがたい良いお話”ではなくて、“神の秘められた計画”(1コリ 2:1)としてのキリストの福音を聞き取るように、今朝もここに招かれていることを感謝しましょう。

アーメン、ハレルヤ。

2月8日 年間第5主日

イザ 6:1～8 コリ 15:1～11 ルカ 5:1～11

1. ルカ

シモン・ペトロが使徒たち一同の中で第一の者として、福音の世界宣教のために召されたということを伝えようと、ルカはここで意図しているように思われます。その伝承の中で恐らく v.8 は、私たちが注目すべき最も重要な部分であります。

v.8 「これを見たシモン・ペトロは、イエスの足もとにひれ伏して、“主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです”と言った。」

最初“先生”と呼んでいたイエスが、ここでは“主よ”と呼ばれています。彼はこのとき“ナザレのイエス”ではなくて“神の子イエス・キリスト”に出会ったのだというペトロの感激的体験を、ルカ福音書は大切に考えました。神顕現に伴うペトロの畏れが見事に描写されています。

聖なる神との出会いにおける人間の畏怖は、あらゆる宗教に共通する要素であると、かつて R.オットーは論じました(「聖なるもの」/岩波文庫)。イエスがシモンに言われた「恐れることはない(= 恐れるな!)」(v.10) は、この神顕現における定型句として聖書の各所で語られています(創 15:1、イザ 41:10、ルカ 1:30、2:10、マタ 28:5 他)。

しかし、私たちが今朝の福音書朗読で更に注目しなければならないもう一つの重要な事柄は、“罪の告白”がそこで同時に起こっているという事実です。そしてこの関連で、私たちは旧約の朗読であるイザヤ書のテキストにも目を向けます。

2. イザ

預言者イザヤの召命は、恐らくエルサレムの神殿における出来事でありました。彼は聖なる神に出会い、その栄光が全地を覆うのを見て、自らと自らが属する民の罪に恐れおののきました。

v.5 「災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の民の中に住む者。

しかも、わたしの目は王なる万軍の主を仰ぎ見た。」

そしてこの神との出会いは、直ちにその罪の赦しと彼自身の預言者としての召命に一つに結ばれました。

罪とはここでは人間の道徳的な問題であるよりも、むしろ神に対するもの、神の権能と秩序を犯すものとして捉えられていることに注意する必要があります。聖なる神の顕現の前で、神の権能を犯す人間の高ぶり(イザ 10:15)が明らかにされ、イザヤは「災いだ。わたしは滅ぼされる」と叫ばずにはいられませんでした。しかもその罪を赦して、御自分の民を救われるイスラエルの神への信頼を宣べ伝えさせるために、彼は預言者として召されたのでした。

3. Iコリ

使徒たちから伝えられ、代々の教会が受け継いで来たキリストの福音を、現代のキリスト者である私たちはもう一度聞く必要があります。なぜなら 20 世紀を振り返って、人間が考えたり時代が要求する“擬似福音”が、聖書が語る使徒たちが伝えた福音に代わって声高に叫ばれて来たからです。私たち 21 世紀のキリスト者は、福音を自分で考え出すのではなくて、使徒たちが告げ知らせた福音をもう一度聞くことに目覚めなければならないのです。

v.1 「兄弟たち、わたしがあなたがたに告げ知らせた福音を、ここでもう一度知らせます。」

v.3 「最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、……」

ペトロが「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と叫んだその罪のために、……その罪から私たちを救い出すために、死んでくださったキリストの福音を、現代のキリスト者は再び聞かなければなりません。福音を聞くことは、ペトロのように「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」という罪の告白を体験することと、決して切り離し得ないことを、聖書は明確に語っています。

v.11 「とにかく、わたしにしても彼らにしても、このように宣べ伝えているのですし、あなたがたはこのように信じたのでした。」

使徒たちが伝えたとおりに福音を聞き、使徒たちが伝えたとおりに信じることを、神は現代の教会に向かって呼びかけてくださっています。そして、教会における福音の継承を導き担っているのは人間ではなくて主御自身であることに、感謝しましょう。使徒パウロと共に現代の教会も宣言し続けて行きます。「最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも(主から)受けたものです」(v.3) と。

アーメン、ハレルヤ。

2月15日 年間第6主日

エレ 17:5~8 Iコリ 15:12~20 ルカ 6:17~26

1. ルカ

v.20 「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである。」

すでに 4:18 で引用されている通り、貧しい人という言葉は イザ 61:1 に照らして理解するとき、正しくルカの意図を読み取ることが出来ます。それは元来、へりくだって敬虔なヤーウェの民、主に贖われた聖徒を象徴する呼び名であります。この旧約聖書における用法をいさかも変更することなく、主イエスは福音を聞いて信じる人々に「あなたがた、貧しい人々」と呼びかけられました。

キリストの福音を聞き、信じた人々、救われた人々を対象としているこの言葉が、信仰から切り離されて独り歩きを始めると、それは神のことばではなくなって単なる人間のイデオロギーと化すことを、私たちは皆実際に体験して来ています。聖書を学ぶことは、聖書自らが語っている通りに私たちが聞くということから始めなければ、信仰にとっては殆ど役に立たないことを知るべきです。

v.20 の「弟子たち」は、ここでは広い意味でキリストの福音を信じて救われた人々を指しています。そしてその人々にとって、希望は神の国の完成にあること(ロマ 8:23-25、エフェ 1:18)が前提になっています。今朝この福音書のテキストと向かい合って、私たちは自らの信仰を吟味しなければなりません。

v.21 の「今飢えている人々」の背景には、詩 107 があります。

「主は渇いた魂を飽かせ、飢えた魂を良いもので満たしてくださった。」(詩 107:9)

そして、そこで歌われているのは、「主に贖われた人々」(詩 107:1) であります。

キリストの福音を信じて救われ、神の国を受け継ぐ希望を与えられた人々だけが、v.21 から慰めと喜びを受けることが出来ます(エフェ 1:17-18、コロ 1:5)。

2. Iコリ

キリストの福音は教会の中で、また教会から外の世界に、聖伝と聖書を通して語られて来ました。教会の福音宣教の働きについて、いつの時代にも“もっと強力に”という反省のかけ声があったことは事実です。しかし現代の教会の急速な世俗化の原因を、単なる“宣教への熱意の不足”のせいにするのは、やや的外れなことのように思われます。

すでに使徒パウロが宣教を初めて間もない頃に、“キリストの復活”と“キリスト者の将来の復活”を信じる事が出来ない人々がいて、教会の中に不安と混乱の種をまいていました。

使徒たちの宣教は明確であって、疑義を差しはさむ余地のないものです。

v.20 「しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました。」

しかしその宣教の言葉を聞く人々には、いつの時代にも、聞いて信じる人と聞くだけで受け入れない人

がいました(ロマ 10:16)。私たちはこの事実を冷静に受け止める必要があります。同じ聖書のテキストが、ある人には神の国の慰めと喜びを伝える神のことばとして語りかけ、また他の人にはそのままでは理解出来ないエイリアン(異星人)の言葉のように聞こえるのです。

vv.16-17 「死者が復活しないのなら、キリストも復活しなかったはずです。そして、キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることになります。」

今朝、自分が「恵みによって選ばれた者」(ロマ 11:5) の中にいることを、感謝出来る人は幸いです。

3. エレ

詩 1:3 と共通する句を含むこのテキストは、エレミヤ自身の信仰の歌でありました。シスターナ礼拝堂の天井画の中には、悩めるエレミヤの姿が描かれています。実に彼はヤーウェの救いを語るためではなくて、ヤーウェが南王国ユダを滅ぼされることを語る預言者として召されました。「主の言葉のゆえに、わたしは一日中恥とそしりを受けねばなりません」(20:8) という苦悩の中で、彼はヤーウェへの信頼を貫き通しました。人々が神のことばを信じることも受け入れることもしないときにも、エレミヤは神の預言者であり続けたのでした。

主日のミサで聖書の朗読が行われることによって、キリストの福音は私たちに訪れます。それは神の恵みです。神は、みことばの富の豊かな食卓によって、信じる者を養われます。

「その声は全地に響き渡り、その言葉は世界の果てにまで及ぶ。」(ロマ 10:18)

ハレルヤ、アーメン。

2月22日 年間第7主日

サム上 26:2～23 Iコリ 15:45～49 ルカ 6:27～38

1.

私たちは聖書の中に四つの福音書を持っていて、そのうちマタイ、マルコ、ルカの三福音書は編集の姿勢がよく似ているので“共観福音書”と呼ばれています。その中で、マルコにはなくてマタイとルカに共通する部分の資料となったと推測されるイエスの語録は、“Q資料”と名付けられています。同一の資料であっても、各々の福音書は独自の用い方をしているために、私たちはキリストの福音の多様なメッセージをそこから聞き取ることが出来ます。私たちは本年(主日C年)は主にルカ福音書を通して、現代の教会に向かって語られる神のこばを聞いているのです。

2. ルカ

v.27 「しかし、わたしの言葉を聞いているあなたがたに言うておく。敵を愛し、あなた方を憎む者に親切にしろ。」

ルカ福音書においては、このイエスの説教は一般大衆を対象にするものとしてではなく、罪を赦された(洗礼を受けた)キリスト者(コロ 2:11-13)に対するものとして用いられていることに注目しましょう。「わたしの言葉を聞いているあなたがた」とは、明らかに神の国の相続人とされたキリスト者を意味しています(6:20-21 参照)。彼らは(未だ罪赦されていない)罪人と対比されています(v.32-34)。ですから今朝この福音書のテキストの前に立つ私たちは、使徒パウロの次のような言葉を心に留めなければなりません。

「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるものです。」(エフ1:7)

「敵を愛する」という言葉が、あまりにも安易にキリスト者の属性の一つであるかのように吹聴されて、心ある人々を偽善の苦しみへと追いつめて来たことを、私たちは知っています。私たちはある程度まで敵に親切にする寛容を持つことは出来ます。また不当な仕打ちを耐えることも出来るかも知れません。使徒パウロは教えました。

「できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らさなさい。愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りにまかせなさい。……あなたの敵が飢えていたら食べさせ、渴いていたら飲ませよ。そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになる。悪に負けることなく、善を持って悪に勝ちなさい。」(ロマ 12:18-21)

恐らくルカ福音書がイエスの語録である“Q資料”を用いて教会に伝えようとした教えは、そのようなものでありました。

しかしもし私たちが、今朝の朗読配分を通して語られる“神のこば”を聞くのでなければ、聖書の学

びは空しいものになってしまいます。「主は生きておられる。」(王上 17:1) 神のことは生きています(ヘブ 4:12)。「この御言葉は、あなたがたの魂を救うことができます。」(ヤコ 1:21) 私たちは単なる道徳的な教えではなくて、「信じる者すべてに救いをもたらす」(ロマ 1:16) 神のことは聞こうではありませんか。

3. I コリ

死後の復活は、キリスト教信仰の柱の一つであって、信条と呼ばれるものの中の基本的な条項であります。代々のキリスト者はこの希望によって支えられて来ました。

vv.47-48 「最初の人(アダム)は土ででき、地に属する者であり、第二の人(キリスト)は天に属する者です。土からできた者たちはすべて、土からできたその人に等しく、天に属する者たちはすべて、天に属するその人に等しいのです。」

私たちが洗礼を受けたのは、キリストの死に与り、またその復活に与るためであったのではありませんか(ロマ 6:3-8 参照)。

v.49 「わたしたちは、土からできたその人の似姿となっているように、天に属するその人の似姿にもなるのです。」

私たちは今は地上の幕屋にあって(II コリ 5:2)不完全な者として生きています。いわば“敵に親切にする”ことは出来ても、イエス・キリストのように“敵を愛する”ことの出来ない者なのです。今はまだ私たちは「土からできた人」であります。しかも、洗礼の秘蹟によって、私たちは「天に属するその人(キリスト)の似姿にもなる」将来の復活を約束されている……、そのような者にとって今朝の福音書の呼びかけは、単なる道徳の教え以上のもの、約束と希望を語る神のことはとなるのです。

4. I サム

彼の命を求めて追跡して来たサウルを、チャンスが訪れたにもかかわらず、ダビデが殺さなかった唯一の理由は、それがヤーウェの油注がれた者であったからでした。

v.23 「今日、主はわたしの手にあなたを渡されましたが、主が油を注がれた方に手をかけることをわたしは望みませんでした。」

人間の道徳ではなくて、神の救済史への謙虚な信仰に共感する人々だけが、生ける神のことは(ヘブ 4:12)をミサの聖書朗読を通して聞くことが出来るのです。

アーメン、ハレルヤ。

2月29日 四旬節第1主日

申 26:4~10 ロマ 10:8~13 ルカ 4:1~13

1. ルカ

主が荒野で悪魔から誘惑を受けられたのは、その受洗に際しての天からの声と関係があると思われます。天からの声はイエスを“神の子”と“苦難の僕”という二つの表象で宣言しました(ルカ3:22)。主イエスにとって“苦難の僕(イザ53章 参照)”と切り離された神の子理解を明確に拒否することは、この荒野の誘惑からゲッセマネの祈りに至る生涯の戦いでありました。「神の子なら」(v.3, v.9)という悪魔の言葉は、イエスがその力を社会的経済的改革のために用いて、この世の支配者となるようにとの誘惑でありました。

かの有名なハルナックが彼の19世紀末の講演で、「福音から具体的な社会綱領を引き出そうと敢えてする人々が絶えない」と嘆いたように(キリスト教の本質/山谷省吾訳)、イエスを社会的改革者として解釈しようとする人が現代にも多いのです。しかし、今朝ともにミサをささげている私たちは、次のことを承認せねばなりません。聖書が語るイエスは“苦難の僕”としての神の子、「わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられた」(ロマ4:25) 救い主であるということです。

主イエスが申命記からの引用を用いて、「……と書いてある」と悪魔にお答えになったように、私たちは新約聖書を引用して、「……と書いてある」と救い主イエス・キリストを告白することを学びましょう。

2. ロマ

「近くにあり、あなたの口、あなたの心にある」(v.8)と述べられているものに注目しましょう。それは「わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉」と呼ばれています。使徒たちが、そして代々の教会が使徒継承によって受け継いで、宣べ伝えて来た“信仰の言葉”を聞くことは、聖書の学びの第一の課題であります。“信仰の言葉”は人間が熟慮して考え出すようなものではなくて、正に聖書から「聞く」ものなのです(ロマ10:17)。代々の教会はこの“信仰の言葉”を正しく聞くために、常に労し戦って来ました。そのような労苦の結実したものに、信条があります。使徒信条やニケア・コンスタンチノーブル信条が、ミサや各種の儀式でもっと頻繁に用いられることは、望ましいことだと言えます。日本カトリック典礼委員会によるこの二つの信条の改訂口語版が司教協議会で承認されて、今年から用いられることになったことは、喜ばしいことです。

新約聖書の諸文書は、この“信仰の言葉”が宣べ伝えられている教会のために、そのような教会によって生み出されたものでありますから、そのような背景(生活の座 Sitz im Leben)への理解が重要なのです。聖書が生み出された当時の教会の宣教を、彼らがそれを聞き、信じ、宣べ伝えたのと同じ信仰に立って現代の教会が受け入れることは、私たちキリスト者が聖書を学ぶための基本的な前提でなければなりません。

新約聖書の中では比較的後期の記述と思われる1ペト1:3-5は、適切にこの“生活の座”を描きました。

「わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように。神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐ者としてくださいました。あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られています。」

一・聖・公・使徒継承の教会とは、この福音を受け継ぎ、この信仰に生きている教会のことです。

3. 申

神の救済史への信仰が、この申命記の告白には生き生きと表現されています。しかし、イスラエルのパレスチナにおける土地取得は、神の救済史の終着点ではありませんでした。私たちキリスト者は、この古代イスラエルの信仰告白を、私たちの目標である神の国の完成の日の天における礼拝と重ね合わせて心に描きます。実に神の救済史は来るべき神の国において完成することを、私たちは知っているからです。

私たちのささげ物が、感謝の典礼の中でイエス・キリストの十字架のいけにえと一つに結ばれるミサの奉獻は、神の国における天上の礼拝の影であり、私たちはその完成の日を待ち望みつつ、この地上のミサをささげて行きます。

「(この水で前もって表された)洗礼は、今やイエス・キリストの復活によってあなた方をも救うのです。」(1ペト 3:21) アーメン。